

愛人と遊び人の話

著者	江口 一久
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	45
ページ	392-405
発行年	2003-12-26
URL	http://doi.org/10.15021/00001814



愛人と遊び人の話

184 間男をする女と遊び人の若者

世間話、世間話。わかるな、友よ。

ある男によめさんがあった。この男のよめさんはどうしようもないほど間男をする。男は旅にでかけた。男が旅にでかけると、いつも、遊び人の若者がやってきて小屋のうらで男のよめさんにあう。二人はあいびきをする。ある日、女はその若者と話をつけておいた。若者は愛人だ。

さて、旅にでかけていた男が家にかえってきた。

さて、男のよめさんは男のために湯をわかす。夕方、女は湯をわかす。男は、「小屋のうらにもっていつておくれ。わしはいつて、水浴びをする」といった。男は体に布をまきつけた。女はいくと、湯をナベにいれたまま小屋のうらにおいた。女は湯をおいたではなにか。

さて、愛人がやってきて、葦簀をさわっている。すぐに、愛人は、「わたしはここにきて、たっている。わたしはここであつて、まっている。どうして、おまえさんはこないのか。こんなことなら、おまえさんとわたしはうまくいかないだらう。まえから、話がついているのに、まだこないのか。こんなことをするなら、おまえさんとわたしはわかれよう」という。男は（女の声色をまねて、「どうということはない、おこらないで。ちかくにいらっしやい、

いうことがあるの」といった。

さて、遊び人がちかづいてきた。男は、「それでは、手をだしておくれ」といった。遊び人は、「いや、わたしの手をだすわけにはいかない」といった。

さて、男は熱湯をくんだ。遊び人は男に、「おまえさんはどこにいる」といった。男は、「ここに、おまえさんのために、帽子をおいておいてあげた」という。遊び人がちかづいてきて、その帽子をとろうとすると、男は遊び人の頭のうえから湯をかけた。男は、「そうか、わしはおまえさんのことがわかった。わしはおまえさんのことがわかった」といった。遊び人はにげていく。つぎの朝、男は王さまのところいき、「王さま、わたしはある人に熱湯をかけた。その人はいつもわたしのよめさんをさがしにきます。おねがいです。その人をさがしてください」といった。人びとはみんなをあっちこっちにいかせた。

さて、遊び人は自分の小屋にねていた。人びとがいくと、遊び人がいた。目は両方とも火傷していて、皮膚がとれていた。人びとは遊び人に、「これから、人のよめさんをさがしにいくな」といったとき。

お話は、おしまい。蒸し焼きができた。

(一九六九—七〇年、語り手 パーサーウオ村出身のアブドゥッ
ラーイ・ウスマヌ、マルアにて)

185 女とその愛人たち

いつも、ある女のむこさんは、「自分のよめさんには愛人がいる」という。ほんとうのこと、よめさんには愛人が二人いた。

さて、男は、「旅にでる」といった。男はおきあがり、落花生、カボチャ、いったヴォアズ豆、タイガー・ナット、ゴマなどなんでも、かうべきものをかかった。男はよめさんのお腹がすかないように、それをかっしておいた。男は旅にでた。ほんとうのこと、よめさんは男がかくれていることをしらなかつた。男は夜にやってきて、自分の屋敷でねるものの様子をさぐるうとしていた。

さて、男が屋敷からでていくまえに、「かえってこない」といった。女は愛人のところにいくと、「あなた、おまえさんには耳がいくつあるか（「きいているか」くらいの意味）」という。愛人は女に、「わたしには二つある（「きいている」くらいの意味）」といった。女は、「うちの人は旅にでかけた。よかつたらおいで。きょうの夜、あそびましょう」という。愛人は、「よろしい。おまえさんの歯がいたくならないように。おまえさんがわたしにいつてくれたことは、たいへんうれしい」といった。

さて、女は二人目の愛人のところにいく。いくと、愛人がいた。女は、「うちの人は旅にでかけた。よかつたらこの時間においで」といった。

さて、しばらくして、夜になると、男はかえってきて、王さまの屋敷のまえにすわりにいった。

さて、一人の愛人が男のよめさんのところにやってきた。二人はむつみあつた。二人はあそびおえた。愛人が家にかえつていこうとすると、二人はだれかの足音をきいた。

さて、女は、「その水ガメのなかにはいりなさい。うちの人がかえつてくる。その水ガメのなかにはいりなさい」といった。愛人は水ガメのなかにとびこんだ。

さて、愛人が水ガメにはいった。ほんとうのこと、女の二人目の愛人がやってきたのだった。愛人がやってきた。女はそれが自分のむこさんでないということがわかつた。二人目の愛人がやってきた。二人はするべきことをした。二人目の愛人が家にかえつていくとすると、むこさんが夜の集いからかえつてくる。女は二人目の愛人に、「今度はほんとう。うちの人がかえつてくる」という。二人目の愛人は、「なんだって」という。二人目の愛人は頭がよかつたので、「姉さん、うちのばあさんが、その水ガメをもちあげ、家までもつてかえつてくれといった」という。女は、「それをもちあげてあげなさい。わたしは布をまいて、頭においてあげる。わたしはそれをおまえさんの頭にのせてあげる」といった。女と愛人は水ガメを愛人の頭にのせた。ほんとうのこと、二人目の愛人は恋敵が水ガメのなかにはいつているのをしらなかつた。

さて、二番目の愛人は水ガメを頭にのせて、あるいていく。愛人は、「ああ、きょうは、おかげでたすかった。そうでないと、あいつのむごさんになくられるところだった」といった。

さて、カメのなかにいる男が、「おまえさんがたすかったのではない。わしがたすかったのだ」といった。

さて、女の二人目の愛人は腹をたてて、水ガメを地面になげすてしまったとき。

(語り手 一九七一年一月二日、パーサーウオ村出身のアップ
ドゥッラーイ・オスマーヌ、マルアにて)

186 ウシ飼いのよめさんと若者たち

世間話、世間話。おまえさんの頭のうえ。わかるな。

あるウシ飼いによめさんが三人いた。男はいつも、ウシの放牧をしている。毎日、男はウシの放牧をしている。ほんとうのこと、男がウシを放牧していると、若者たちが三人の男のよめさんたちのところにやってくる。若者は一人ずつよめさんをわけあった。ある日、ある人がウシ飼いの男に、「おまえさんがかけていったら、おまえさんのよめさんたちが若者たちとなにをしているか知っているか」という。男は、「しらない」といった。その人は、「よろしい。きょう、ウシを放牧すると、おまえさんの屋敷にかくれてお

れ。なにがおこるかわかるだろう」という。男は、「よろしい」といった。男はウシを放牧した。男はいつも日暮れどきにかえってくるではないか。男はウシを放牧すると、もどってきて、屋敷にかくれていた。若者たちがやってきた。三人だった。若者たち三人がやってくると、一人の若者は男のよめさんを一人よんで、であつて、やりたいことをした。若者はコーラの核を三つと香水一瓶と百フランをとり、女にやった。

さて、もう一人も、やりたいことをしたあと、コーラの核を三つと香水一瓶と百フランをとり、女にやった。若者たちはやりたいことをしてしまつと、どこかにいつてしまつた。若者たちはいつてしまつた。日暮れどき、男はでていつた。男は日暮れどきに野原にいつた。男はウシをつれてかえつてきた。男は食事をした。男はよめさんをよんで、「おまえの腰布をとれ」といつた。よめさんが腰布をとると、男はよめさんの陰部をたたき、「おまえは、コーラの核三つと香水一瓶と百フランを手にいれた」といつた。この女がいつてしまつと、男はもう一人に、「おまえも、こい。おまえも、コーラの核三つを手にいれた」といつた。(女がいつてしまつ。男はもう一人のよめさんをよぶ。)男はそのよめさんの陰部をたたき、「おまえは、コーラの核三つと香水一瓶と百フランを手にいれた」といつた。男は女たちを三人よびおえた。そのつぎの日、男が放牧すると、若者たちがみんなやつてきた。若者たちが屋敷のそとにいつると

きに、女たちは、「もどつていきなさい。もどつていきなさい。あそこがもどりなさいといっている」という。

お話は、おしまい。蒸し焼きができた。

(一九六九―七〇年、語り手 パーセーウォ村出身のアブドゥッ
ラーイ・ウスマース、マルアにて、マルアにて)

187 嫉妬深い男(1)

ある男がいた。男は一人前の男だった。男はたいへん嫉妬深かった。すなわち、男は村からでていき、一人ですんだ。

さて、男は村からでていき、一人ですんだ。村長が、「なんだって、わしの子分が村からでて、一人ですんでいる。どうしたらいいだろう」といった。

さて、ある男がたちどまり、「なんだって、わたしにはわかる。その人はきれいなよめさんをもらったのだ。その人は村をでていき、村のそとにすんでいるのだ。その人は嫉妬深いのだ。よめさんをとられてはこまるからだ」といった。

さて、その男は、「それで、わたしはこの村からでていき、わたしのやり方で、その人を村につれてかえってあげよう」といった。男は村からでていった。

男は村からでて、そこでとまった。男はいくと、(ライオンの皮

とゾウの皮と)ヒョウの皮をとった。いくと、ハイエナの皮をとった。男は墓から死体をほりだした。いくと、死体から腕をとった。雨がいきよいよくふっている。男はおきあがった。男はおきあがり、どんどんはしつていった。男は嫉妬深い男の屋敷にいき、「ごめんください。ごめんください。ごめんください。ごめんください。先生。ごめんください。先生。ごめんください。先生」という。嫉妬深い男は、「こい」といった。

さて、男はすわった。嫉妬深い男は、「ここまできなさい。ここまできなさい。ここまできなさい。ここに葦簀がある」という。男はライオンの皮をとり、その皮のうえによこになった。男はいくと、ヒョウの皮をとり、その皮のうえによこになった。男はいくと、ゾウの皮をとり、その皮のうえによこになった。男は、「きょうは、おちつくところができた」といった。きれいなよめさんをもつ男は、だれにもまけないほど嫉妬深い。もう一人の男は日除けのしたにいった。

さて、男たちはすわった。やってきた男は雌ヤギの太股をだし、火のそばにつきさした。男はそれに塩をふりかけた。塩をふりかけて、その肉をかじった。男は人の太股をとりだし、火のそばにつきさした。男はそれに塩をふりかけた。塩をふりかけて、「これがやるまで、しばらく火のそばにおいておいて、たべよう」といった。

さて、嫉妬深い男がそれをみた。男は嫉妬深い男とそのよめさんにむかつて、「おまえさんたちのうちだが、たちあがって、水をくれるのか。わたしは水をのむ」といった。嫉妬深い男が、「わしがあげる」といった。よめさんが、「わたしがあげる」といった。嫉妬深い男が、「わしがあげる」といった。

さて、嫉妬深い男はそこからでていくと、はしりながら、やわらかいウンコをした。男ははしっていつてしまうと、かえってこなかった。男はこわかったのだ。そこからやってきた男が自分よりつよく、よめさんを横取りしてきたからだ。

さて、男はにげていった。そこからきた男は、「女よ、こわがるな。おまえさんのむこさんが嫉妬深いので、手だてをこうじ、おまえさんを村までつれてかろうとしただけだ。おまえさんをつれて野原にやってくるのは、いいことか。わるいではないか」といった。さて、男はその女をつれて、村にいったとき。

(一九八一年二月一六日、語り手 オマル・セイニ・トービ・ム
ーサ・ラベヤ、レイ・プーバにて。オマルの父親はモノ族、母親はムプム族。オマルは、フルフルデ語よりムプム語がよくわかる。オマルはレイ・プーバ地方のトゥボロで二三歳までいた。この話は、ラーメ族のジョツカディ・ドラジャバからウロ・トゥッペ町で聞いたという)

188 嫉妬深い男(2)

この話は、王さまと大臣の話。

大臣がどうしようもないほどきれいな女をめぐった。大臣は、「わたしは村にはすまない。わたしのよめさんがきれいだからだ。若者たちがわたしのよめさんをとってしまふ。わたしは野原にいく」といった。大臣は野原のまんなかに入った。大臣はいくと、自分の屋敷をつくって、よめさんとそこにすんだ。王さまは大臣に用事があるとき、大臣のところを人やらせ、野原からよんでくる。王さまは、「よろしい。いいやり方でもって、わしの大臣を村につれてかえつてきてくれるものはいないか。わしは村にいるではないか」といった。だれもが、「できません」という。

さて、ある男がでてきた。男は、「いつて、人の頭をもつてきておくれ」といった。王さまの家のものがいつて、死体から頭をとって、男にもつてきた。男は、「手が手にはいるか。いつて、手をもつてきておくれ」という。王さまの家のものがいつて、死体から手をとって、男にもつてきた。男は、「いつて、塩をもつてきておくれ」という。王さまの家のものがいつて、男に塩をもつてきた。

さて、若者は野原にでかけていつた。若者が野原にいくと、雨がふったあとで、まっくらだった。

さて、若者は大臣の屋敷についた。大臣は小屋のなかでよこにな

り、よめさんと話をしている。火がもえている。二人は小屋をしめずに、よこになつてゐる。

さて、若者はそこについた。若者は人の手を火のそばに、たてかけた。雌ヒツジの前足と肋をとり、かじつてゐる。人の手のうえに、塩をふりかけた。いくと、二人のうえに塩をふりかけた。

さて、女も、男も、屁をこいた。

さて、女は、「わたしは塩をかけられた。わたしたちはどちらも塩をかけられた」といいはじめた。女がそういうと、大臣はとびおきて、裸のまま、村にかえつてきた。女がおきようとすると、若者は女をつかまえて、「わたしがきたというのに、どうしたところか」というと、女と朝までねた。若者は女をつれて、王さまのところに行った。大臣は、「アッラーがあなたにいいことをしてくださいますように。夜、怪物がやつてきて、わたしはよめさんをとられてしまいました」という。王さまは、「なんだつて、大臣よ」といった。そういうと王さまはわらつてゐる。それからずつとあとで、王さまは自分の屋敷から大臣のよめさんをつれだした。王さまは大臣に、「これはおまえさんのよめさんではないか。大臣よ」といった。大臣は、「なんですつて、わたしのよめさんはずつとまえに、怪物にたべられてしまいました」といった。王さまは、「この女はおまえさんのよめさんだ」といった。王さまは大臣によめさんをかえしてやつた。それから、大臣は野原より、村にゐるほうがよいと

いったとき。

(一九六九—七〇年、語り手 バーセーウオ村出身のアブドゥッ

ラーイ・ウスマース、マルアにて、マルアにて)

189 嫉妬深い男 (3)

お話、お話。

ある男のしたことをしらないか。この男は自分の家を人とはなれたところにつくつた。男は嫉妬深かつた。男はだれも、自分のところを客をとめなかつた。男はいくと、自分の家を人とはなれたところにつくつた。男のよめさんは髪をあむ。人がやってくると、女はその人の髪をあむ。その人は家にかえつていく。人がやってくると、女はその人の髪をあむ。その人は家にかえつていく。女は、「だれそれよ、わたしが髪をあむなら、パーバ・ジュロ (ジュロの父親の意) がかえつてくるまでに、いつてしまつておくれ」という。女が髪をあむ人だ人は家にかえつていく。パーバ・ジュロはいつもかえつてくるわけではない。女はある人の髪をあむ。あんで、「さて、だれそれよ、家にかえりなさい。パーバ・ジュロがかえつてくる。おまえさんがいるのがみつかるといった。」

さて、その人は、「わたしは家にかえらない。わたしはパーバ・ジュロをみる」といった。女は、「だれそれよ、パーバ・ジュロが

かえってくるまでに、いつてしまっておくれ。おまえさんがいるのがみつかる」という。その人は、「わたしは家にかえらない。わたしはバーバ・ジユロをみる」といった。バーバ・ジユロはウシに草をたべさせ、ウシをおい、家にかえってくる。バーバ・ジユロはあるきながら、村にむかつて、いった。

「インナ・ジユロ(ジユロの母親の意)よ、どうも。

インナ・ジユロよ、どうも。

わたしは、インナ・ジユロのむこさんだよ。

マジヤマジヤ・マジヤマジヤ」

さて、それをきいて、女のところに来ている人がいう。

「バーバ・ジユロよ、どうも。

バーバ・ジユロよ、どうも。

わたしは、バーバ・ジユロのよめさんだよ。

マジヤマジヤ・マジヤマジヤ」

バーバ・ジユロは嫉妬深かった。

さて、この話はひろがっていった。男は、きょう、だれが自分の家に来たのかと聞いた。男は家にもかつて、またしてもいった。

「インナ・ジユロよ、どうも。

インナ・ジユロよ、どうも。

わたしは、インナ・ジユロのむこさんだよ。

マジヤマジヤ・マジヤマジヤ」

さて、女のところに来ている人がいった。

「バーバ・ジユロよ、どうも。

バーバ・ジユロよ、どうも。

わたしは、バーバ・ジユロのよめさんだよ。

マジヤマジヤ・マジヤマジヤ」

さて、バーバ・ジユロはまたしても村にむかつていう。

「インナ・ジユロよ、どうも。

インナ・ジユロよ、どうも。

わたしは、インナ・ジユロのむこさんだよ。

マジヤマジヤ・マジヤマジヤ」

さて、女のところに来ている人がいった。

「バーバ・ジユロよ、どうも。

バーバ・ジユロよ、どうも。

わたしは、バーバ・ジユロのよめさんだよ。

マジヤマジヤ・マジヤマジヤ」

バーバ・ジユロが家につくと、すぐに、女のところに来ている人のところにいき、女のところに来ている人を何度もなぐって、ころしてしまった。男はその人の肉をとり、肉についたハエと肉をすてた。その人は骨だけになった。男はいう。

「インナ・ジユロよ、どうも。

インナ・ジユロよ、どうも。

わたしは、インナ・ジユロのむこさんだよ。

マジヤマジャ・マジヤマジャ」

さて、骨がいう。

「バーバ・ジユロよ、どうも。

バーバ・ジユロよ、どうも。

わたしは、バーバ・ジユロのよめさんだよ。

マジヤマジャ・マジヤマジャ」

男はその骨をひろいあげ、すてにいった。

さて、男がいう。

「インナ・ジユロよ、どうも。

インナ・ジユロよ、どうも。

わたしは、インナ・ジユロのむこさんだよ。

マジヤマジャ・マジヤマジャ」

なんの返事もない。男にはなにもきこえなかった。

さて、男は目をさますと、家畜に荷物をのせた。

さて、男はベッドにいるインナ・ジユロをとり、ゴザでくるみ、

頭にのせていく。

さて、男は縄をとり、まるめて、いくと、そのうえにのせた。男

はもどっていった。男はやってくると、ゴザをまるめ、ベッドにお

いた。男はいくと、縄をそのうえにおいた。

さて、人がインナ・ジユロにあいきて、インナ・ジユロのため

に（ゴザにくるんだ）おおきな石をもってきた。

さて、男は家畜に荷物をのせた。男はその（ゴザにくるんだ）おおきな石をインナ・ジユロだとおもって、家畜にのせた。男はほとんどあるいていく。男は家畜のさきにあるいていき、石にむかつて、「インナ・ジユロよ、インナ・ジユロよ。わしはおまえをおろしてやる。やすむのだ」という。

さて、石はインナ・ジユロのかわりに、「インナ・ジユロはねてしまった」という。男はほとんどあるいていく。男は、「インナ・ジユロよ、インナ・ジユロよ。わしはおまえをおろしてやる。やすむのだ」という。石はインナ・ジユロのかわりに、「インナ・ジユロはねてしまった」という。とうとう、男はとまった。

さて、男は石をインナ・ジユロだとおもって、ベッドのうえによこにした。石はゴザでくるんだである。男は木をきり、（遊牧民のつくる簡単な）小屋をたておえた。男は草で小屋をふいた。男はいくと、水をくみ、薪をひろった。男はキャンプにウシをつれてかえってきた。男は粉をひき、火をつけた。男は寝具をひろげた。男は、ほんとうはおおきな石がはいっているが、インナ・ジユロだとおもって、ゴザをひらいた。男はインナ・ジユロとねようとす。

さて、男がゴザをひらくと、そこには石がはいっていた。男はずっとないていた。男は石をとると、石で体をうって、死んでしまったとき。

こうして、わたしのお話は、おわる。

(一九六四年九月、語り手(遊牧をする)ジャーフン氏族の人、
ガウンデレ地方、ヤルンパンのちかくのババ村にて)

190 男とよめさんの愛人がなにをしたか

村にはたくさんの人たちがいる。村にはたくさんの人たちがいたが、ある男は、ひどく嫉妬する。男はきれいな女と結婚していた。男はどうしようもないほど嫉妬する。

さて、ハンサムな若者がいて、いろいろなことができた。若者は嫉妬する男の屋敷にはいつていった。若者は男のよめさんに、「わたしはおまえさんがすきだ。わたしはさわりたい。おまえさんがむこさんとねるとき、むこさんのペニスをさわりたい。みてみる」といった。

さて、女は、「それだけかい。よろしい、日暮れの礼拝のあと、あの人が食べ物をもつて、屋敷の入り口に行くとき、いらっしやい」といった。

さて、日暮れの礼拝がおわった。女のむこさんは食べ物をもつて、屋敷の入り口にいった。若者がやつてきた。女は、「いつて、ベッドの向こう側によこになりなさい。もどってくるから」といった。若者はベッドの向こう側によこになった。女のむこさんがやつ

てきた。むこさんと女は、いっしょにすわった。

さて、男と女は小屋にはいった。女は、「ああ、ああ、あなた。ああ、あなた。ああ、あなた。きょう、わたしはあなたとねたかった。わたしは、ながいあいだあなたとねていない。わたしは、ながいあいだあなたとねていない」といった。

さて、男は女とねると、何度も女をもとめた。男はねはずまった。女の愛人が手をのばし、男の毛をぬいた。男は、「うっ」といった。女は、「なんなの。あなた、わたしの爪がその毛にひっかかっただけ。べつになにもない」という。男はねはずまった。女は何度も男をもとめた。しばらくすると、女の愛人は男の毛をにぎり、ひっぱった。男は、「うっ」といった。女は、「なんなの。わたしの爪がその毛にひっかかっただけ」という。ほんとうのこと、女の愛人がベッドの向こう側によこになっていて、男の毛を何度もひっぱるのだった。

さて、女は男のペニスをにぎり、ひっぱった。男は、「うっ」といった。

さて、女は、「なんなの。わたしの爪がその毛にひっかかっただけ」という。男はねてしまった。男がねると、女はおきあがり、戸をあけた。女の愛人はでていった。

さて、朝、バウ・ゲーム(地面に穴をほり、石や種などを駒にし

て、あそぶゲーム)をする場所に、人がたくさんあつまつた。男たちはパウ・ゲームをしてあそんでいる。女の愛人はパウ・ゲームをしながら、自分のみたことを再現しようとする。

さて、女の愛人は嫉妬する男をよび、「おい、友よ、きなさい。パウ・ゲームをしよう」といった。男がやってきた。男がやってくる。女の愛人が、「そこに駒をおけ。そこにおけ。そこにおけ。そこにおけ。そこにおけ。そうだ、そこに駒をいれ、そこから駒をぬきとる。うっ」といった。

さて、男は女の愛人のいうことをきいている。ああ、男は駒をとれなかった。男は駒を何度ももちあげる。男は、「駒をおけ。駒をおいた、駒をおいた、駒をおいた」といった。

さて、女の愛人は、「なんだって、わたしはここにおく。わたしはこの場所をとった。わたしは、そこから駒をぬきとる。うっ」といった。

さて、男は、「なんだって、きのうの晩、自分がよめさんとかわした会話がそとにでるとはどういうことか」と独り言をいう。女の愛人は、「なんだって、もう一度、駒をおきなおそう」といった。二人は穴に駒をいれていった。

さて、女の愛人が突然、「わたしはここに駒をうっ。そこに駒をいれ、そこから駒をぬきとる。うっ」という。男はパウ・ゲームをやめ、駒をほかした。男がかえっていくと、よめさんが小屋にい

た。男は女に、「なんということか、おまえ、きのうの晩、おまえとわしがかわした会話が、どうしてそとにでていったのか。わたしはそとであの会話をきいた」という。女は、「なんだって、あなた、そんなことをいわないで。もうおわつた話なのに、そんなことをいわないで。やめなさい。わたしの話をきいておくれ」という。

さて、男はその話をやめた。朝、女はむこさんに、「朝早く、八時ころ、野原にいつておいで」といった。八時ころ、男は弓と矢をもって、野原にでかけていった。女の愛人がやってきた。愛人がやってくると、女は屋敷にいた。女は、「愛人よ、きたの。愛人よ、きたの。愛人よ、きたの。どうも、どうも、どうも。ここにすわりなさい。ここにすわりなさい。水をもってきてあげよう。のみなさい」といった。女は水をもってきて、愛人にわたした。愛人はその水をのんだ。

さて、女のむこさんは、野原にいかなかったのだろうか、さつさと屋敷にもどってきた。

さて、(むこさんがかえってくるのに気がつき)女は愛人に、「いつて、そこにすわりなさい。あなたをゴザでかくしてあげよう」といった。女はたちあがると、愛人をゴザでかくした。女はむこさんに、「あなた、小屋もあなたのもの。屋敷もあなたのもの。日除けもあなたのもの。すわりなさい。すわりなさい。すわりなさい。話をしましょう」といった。

さて、男はすわった。二人はすわった。女は食べ物をつくって、男にわたした。男はそれをたべた。女は水をくみ、もってきた。男はそれをのんだ。女は、「あなた、小屋のなかにいきましょう。いつて、あそこにすわりましょう」といった。

さて、女は男に、「あなたは、野原でなにかをつかて、獲物を射るの」とたずねた。男は、「ああ、弓と矢で獲物を射るのだ」といった。女は、「たちあがり、その弓をとつて、ひきなさい。みてみましょう」といった。男はたちあがり、弓をとり、ひいた。女は、「いま、ボホールヌマレイヨウを射る矢をみせておくれ。アフリカクロスイギユウを射る矢をみせておくれ。ヤブスジカモシカを射る矢をみせておくれ。蔓アカシアの茂みにいるシカを射る矢をみせておくれ。わたしはそれをみる」といった。男はそれぞれ種類のちがう矢をみんなみせた。

さて、女は、「さて、矢をうつてみなさい。いま、あのゴザをうつと、矢はつきぬけるの」といった。男は、「もちろん。あのゴザをうつと、矢はつきぬけ、壁にささる」といった。女は、「さて、矢をうつてみなさい。矢をうつてみましょう」といった。男は矢をえらんでいる。女は、「それはよしなさい。それはよしなさい。それはよしなさい。ボホールヌマレイヨウを射る矢をとりなさい」といった。男はその矢をとった。男がうとうとすると、女は、「うたないで。うたないで。うたないで。ゾウを射る矢をとりなさい」と

いった。男はゾウを射る矢をとった。女は、「うたないで。うたないで。うたないで。カバを射る矢をとりなさい」といった。男はカバを射る矢をとった。女は、「うたないで。うたないで。うたないで」といった。

さて、女の愛人は、ゴザの向こう側によこになつてゐるが、ウンコをし、小便をたれた。愛人はでてきた。愛人はたちあがつて、様子を見ようとした。男がみると、だれかがいた。男とパウ・ゲムをした男だった。その男がたちあがろうとすると、男はその男を平手うちしようとする。女は、「その人をうたないで」といった。女は、「その人をうたないで。わかるね。アツラーのおかげで、その人はあなたにつかまつた。うたないで」という。女は愛人に、「ズポンをぬきなさい。ズポンはウンコだらけ。ウンコをいれたままズポンをまきなさい。そとにでていきなさい」という。屋敷のそとにはたくさんの人がいる。男は女の愛人をさきにあるかせた。女の愛人は裸だった。女の愛人はペニスを手でかくした。愛人はそうして屋敷からでると、道までやつてきた。人びとはこの若者のことをわらつた。

さて、この若者はどこかにいつてしまったとき。
そういうことで、このお話はおしまい。

(一九八一年二月一六日、語り手 オマル・セイニ・トビー・ム
ーサ・ラベヤ、レイ・ブーバにて。オマルの父親はモノ族、母

親はムブム族。オマルは、フルフルデ語よりムブム語がよくわかる。オマルはレイ・ブーバ地方のトゥボロで二三歳までいた。この話は、四十歳になるホーレ・ムブータ・ドワイジヨから聞いたという。

191 男たちのペニスをきるという女

べつのお話をしよう。

わかるな。ある女がいた。女は男と結婚した。男は就職し、お金をかせぎにいった。就職していた。

さて、男たちはお金をかせぎ、いまから、故郷にかえるといつた。この男のよめさんはいへんきれいだつた。

さて、男は幼友だちに、「ほんとうのこと、きみがしっているほくのよめさんは、男のペニスをきる」といった。

さて、男たちは、「それはうそだ。それは、あの女がきれいなためそういつているのだ。むしろがあの人に手をださないようにするためだ」といった。

さて、男はよめさんに、「わしらの町の男にはあれが二本ずつある」という。

さて、男の幼友だちがやってきた。男たちは三人だつた。

さて、一人は屋敷の入り口にたつた。一人は入り口の小屋にたつ

た。一人は女の小屋にはいった。男が女のところにいくと、女はこの町の男には二本あるか、一本あるのかたしかめるために、手をやって、さわろうとする。

さて、男は女がペニスをきろうとしているとおもい、身をひき、「うっ」といった。

さて、入り口の小屋にいる男が、「きられたか」といった。

さて、屋敷の入り口にいる男が、「すばつときられたな」といった。

さて、三人はさきをあらそつてにげていった。男たちはしようとおもつていたことができなかったとき。

わかるな。この話もすこしはおかしい。

(一九八三年一月二二日、語り手 サリー・ジーカ、ガウンデレにて)

192 嫉妬深かった男とよめさんの愛人

ある女のむこさんは嫉妬深かつた。わかるな。むこさんは嫉妬深かつたので、いつも、自分の短刀をときすましていた。いつも、短刀をといでいる。男は自分のよめさんと若者が仲がよいのをしっている。屋敷の主人は、「わしはでかける」というと、若者が屋敷のそとからズボンをぬぎ、やってきた。小屋の戸のしたのほうに穴があいている。若者はとんとんとはしつてくると、自分のペニス

をみて、「つかまえておくれ、つかまえておくれ、つかまえておくれ」という。女は戸の穴からベニスをつかまえる。若者は小屋のそとにいる。二人はしたいことをする。ある日、むこさんがやってきて、女をべつの小屋にうつらせた。

さて、若者がとんとんととはしつてくると、「つかまえておくれ、つかまえておくれ。こまった」といった。小屋にいる男が、「どうしてこまっているのか」という。若者は、「うん」といった。小屋にいる男が（女の声をまねて）、「おまえさんも、手をだして、さわりなさい。友よ」といった。男は若者の手をとり、若者のベニスをつかんだ。若者が、「おまえさんもおまえさんのものをだせ。こまった。おまえさんもおまえさんの手をだして、さわれ」といった。若者が手をさしだすと、男はその手を顎のしたにもつていき、髭でこすった。若者は、「アッラーにかけて、もう二度としない。わるかった。ああ。わるかった、わるかった」といった。男は、「服をぬげ」という。若者は服をぬいだ。男は、「それをみんなぬいで、こちらからわたせ」という。男は若者を裸にし、はなしてやった。夜があけて、朝になった。若者は恥ずかしかったので、村からどこかにうつっていった。

さて、人びとはその服をみて、「わかるな、この服はあの人の隣の人のものだ」という。

さて、人びとはその女のむこさんがその服をきているのをみた。

人びとは、「きょう、だれそれよ、おまえさんはあの人の服をきて、どこにいくのか。おまえさんはあの人をからかったのか」という。男は、「あの人にききなさい」という。

さて、このようにして、この話はおわった。友よ。

（語り手 一九七一年一月二日、バーセーウオ村出身のアドゥッラーイ・オスマーヌ、マルアにて）

193 運転手

わたしはおまえさんに、ガルアとマルアのあいだで、わたしたちが道すがら、売春婦たちとどんな会話をかわしているかをおしえてあげよう。

さて、運転手が、「さて、きて、車をおしてくれ」という。車がエンジンの音をたてながらはしりだす。女が、「まっっておくれ、パトロン。まっっておくれ。パトロン」という。運転手は、「どこにくつもりだ」という。女は、「わたしのパトロン、男に離縁されたの。わたしはガルアのローペーレ地区のタンワというところにかえるの」という。運転手は、「それなら、百五十フランもらおう」という。女は、「パトロン、わたしには一銭もない。きいてよ。わたしは男に離縁され、八年にもなる。いま、どこでお金を手にいれるというの」という。運転手は、「うそをつくな。車にはいれ」と

いう。ドアをバシンとしめる。運転手は、「ちゃんとすわっておれ」という。女は、「わたしはすわっている。パトロン」という。プウウウ。女は、「アッラーにかけていうわ。パトロン、わたしとアッラーだけのあいだの話だけど、わかっていたなら、こんなガタガタの車にのらなかつたのに」という。運転手は、「ちゃんとすわっておれ。車をロバのようにみるのはよせ」という。女は、「すわっている。パトロン・ンガファイ、わたしはフルベ族みたいに車のことはわかっている」という。プーズー。運転手は、「おまえさんはガルーアにいつて、男といっしょにすんでいるのか。ずっとその男といっしょなのか」という。女は、「パトロン、その男にまたしても離縁された。それでわたしにができるの。糞つたれめ、あの気遣いめとわかれてやった。おまえさんには、あいつのしたことがわからないだろう。いま、わたしはおまえさんといっしょになる」という。運転手は、「なんだつて、うそだ」という。女は、「ほんとう。アッラーにかけて。パトロン」という。ズーズー。運転手が、「ちゃんとすわっておれ。山をこえる」という。女が、「わかつた、パトロン」という。車が、「ハワウ（女の名前）・デイージャトウ（女の名前）・ミ・イター（「わたしはいや」の意味）・ミ・イター」と音をたてながらはしっていく。カタカタ・クッルルル・ガチン・チュー。女が、「パトロン。アッラーにかけていうわ。わたしはおまえさんがすき。アッラーにかけて。わたしはどうしようもないほ

どすき」という。運転手は、「わたしもハエがウンコにたかるようにおまえさんがすきだ」という。ズー・クッルル。運転手が、「いまその街をとおりますぎていくが、その名前はなんというのか」という。女は、「ここはピトワではないの。パトロン」という。運転手は、「なるほど。おまえさんはこの場所をしっている。いつも、こういうところであそんでいるのだな」という。女は、「わたしに男が手にはいらぬというわけではないが、こうなればわたしはあなたがすき」という。ズウウウ。運転手は、「ガルーアにいつたら、パトロン・ンガファイに会いに行くのだな。それとも、おまえさんはなにもしないのか」という。女は、「わたしはおまえさんのいるところがわからない。わかつていたら、おまえさんにあいにいけないことはない」という。運転手は、「なるほど」という。ズウウウ。女は、「おまえさんはケンという店をもっている人が元気がどうかしているかい。ガルーアではあそこの景気がよいし、金もある」という。運転手は、「なるほど。おまえさんはケンという店をもっている人のところにいるのか」という。ルー。

お話は、おしまい。

（一九六九—七〇年、語り手 バーセーウオ村出身のアブドゥッラーイ・ウスマヌ、マルアにて、マルアにて、マルアにて）

